

佐伯祐三贗作事件年表

平成5年9月～12月	自由と画布 発行
平成6年	都城市 遠野市 武生市に佐伯作品の寄贈申し込み。山甚氏 11点を4億円で購入
平成7年	匠秀夫 巴里日記 発行
平成7年11月13日	武生市佐伯作品・資料に関する調査報告
平成7年12月22日	武生市寄贈絵画全て返却
平成8年4月19日	落合氏「武生市佐伯作品・資料に関する調査報告」に対する 吉園側意見及び釈明
平成8年～平成14年	中島氏名誉毀損裁判
平成9年	落合氏 天才画家「佐伯祐三」真贋の真実 発行
平成12年1月14日	00:00:00 共T647社会090 女性役員に実刑判決：1億2千万円詐欺事件_知り合いの会社 社長から一億二千万円をだまし取ったとして、詐欺罪に問わ れた岩手県遠野市の会社役員吉園明子被告（56）に対し、 東京地裁は十四日、懲役二年六月（求刑懲役五年）の判決を 言い渡した。

佐伯祐三贗作事件

佐伯祐三を研究するうちに紀伊国屋で落合氏の天才画家佐伯祐三の真実という本を買った。これには私もまいった。佐伯は吉園周蔵というスパイによって金銭を授与されフランスにも行くことができた、妻米子が佐伯祐三に売れる絵を描く指導をする、佐伯がもともと精神に異常があるなどと書いてある。その後佐伯祐三のパリ日記を読み米子の加筆説を信じるようになってしまった。私は数年間これを信じ佐伯祐三の評伝を調べながら落合氏に会いに行ったり、パリ日記の編集者に会いに行ったりもした。落合氏はもちろん米子加筆説論者であり、佐伯の絵の多くは周蔵のもとにあったとしている。パリ日記の編集者には3回あった。一回目は私が米子加筆説を信じていたころである。その時彼が強調したのは日本の美術界は一部の画商たちに牛耳られているということであった。その時聞いた話を下記にまとめる。

佐伯祐三のパリ日記編集者との会談 I

土方定一さんという方が鎌倉（神奈川県立近代美術館）から日本の作家を評価することを始めた。土方さんは朝日晃氏を都立の美術館に追いやった（当時は鎌倉のほうが都内より上であった）。朝日晃氏は私生活上のトラブルなどで都内に飛ばされ、匠秀夫さんが副館長になった。米子と佐伯がお互いに筆を入れる、そういう時代はそれでよかった。佐伯の絵を神戸の市長などが持ち上げようとする動きがあり、大阪の人たちが高値をつける、佐伯の絵は異常な値上がりをするようになる。これに便乗したのが朝日晃氏である。これが大きな災いとなる。長崎の横手貞美（医師の息子）は山口長男とともにパリに行くが結核で死亡。山口長男がその絵を持って帰る。朝日晃氏

はこれを展覧会に出品するといっただけで借りて帰るが、それらの絵は行方がわからなくなってしまった。朝日晃氏の評判は悪かった。匠さんに言わせれば朝日晃氏は日本では佐伯研究家と通っているが佐伯の心の内などなにもわかっていない。内面をもっととらえるべきなのにとのことであった。

資料によると 吉藺周蔵は特務機関として動き、麻酔薬としてケシ栽培をする。その周蔵を佐伯と米子は訪ねていく。そこの医師と米子はくっついてしまう。その聞き役として回るのが周蔵。(その資料の中では米子の男関係は荻須などが知られている)。周蔵が世話をして佐伯をパリにやる。できるだけ記録を書いておけとわたしたのがこの日記帳「佐伯祐三のパリ日記」である。それとともに吉藺コレクション(佐伯祐三作とされる絵画)と大量の資料がでてきた。その資料には佐伯の絵は米子が加筆したものと何度も書かれている。日動画廊、米子を束ねたのが朝日晃氏。朝日晃氏は米子のところに入りびたる。日動画廊、米子、朝日晃氏の証明書つき、絵の値段は落ちない。絵の値段はますます上がる。

米子の線は細いが佐伯の線は太く荒々しいもの。つまりところこの贋作事件は白黒がつけられていない。真作が 贋作かどうか、この二つの反対意見はお互いを全面否定するものである。一方伝え聞くところによると吉藺明子さんの旦那さんが喫茶店をしていて佐伯?の絵を飾っていた。この人も絵を描いたそうで、この人が描いたという可能性もある。この編集者の弁。この本の40ページから92ページの「吉藺周蔵と佐伯祐三」という文章は吉藺明子さんのワープロで打ったものがもとになっており、原文照合ができていない。原文を見せてくれるようにたのんだがだめであった。つまりこの部分は編集者がチェックできていない。ワープロ原稿であるため本物かどうかはわからないとのこと。さあ〜と50枚で原稿ができるという時、匠さんが亡くなってしまった。そこで河北倫明さんにこの本の序文を書いてもらうことになった。河北倫明さんは当時美術界の大物であった。なんと彼は1週間で序文を書いてくれた。川北氏の弁は偽者を本物というのはかわいいが、本物を偽物というのは許せないということであった。

私は日記について、「これを佐伯祐三が書く時、妻の米子はそばで見たり、盗み見しなかったのか 不思議に思う。同じ部屋に住んで妻に見られたら困ることがたくさん書いてあるのだから。」それに対する答えはこのパリ日記は周蔵が佐伯に送ったものでまた自分に送るようにいったもので、鍵がついており米子は見ていないであろうとのこと。これらの日記は全て家で書かれたもので絵は黒が主ではあるが色がついていた。本のあとの方の絵は全て印刷の都合で残念ながら色彩がないようになっている。他に佐伯祐三と薩摩千代子の手紙があった。薩摩千代子は佐伯に絵を習っていた。二人の手紙も大量にあった。これを出すと別の物語になってしまう寂しがりやの二人の純愛物語であった。

佐伯祐三のパリ日記編集者との会談Ⅱ

まず編集者に「あなたは、この件について、本当と思いますか？ うそと思います

か？」と聞かれました。「パリ日記を含めて、全てうそであると思います」と答えました。また、「吉園明子とはどういう人物であったか？千代子と佐伯の手紙をどう思うか？また、落合さんの本や HP についてどうでしょう。落合さんが書かれているのは一見本当のように思われますが、実はまったくその根拠が書かれていない。周蔵がパリに行ったことを証明しているように見えるが、実はちゃんとした根拠はない。落合さんの調べた周蔵や明子の経歴もちゃんとした出所はない。筆跡鑑定についても正しいとは言えない。落合さんについて、どう思われますか？」巧さんは彼に「どう思うか？これ本物と思うか？」と何度も聞いたそうである。編集者は「これが本物であろうと偽者であろうと、画商が牛耳る世界に一石投じるのではないか」と答え、出版の運びとなった。

吉園側によって佐伯の水彩画はたくさん持ち込まれたがとても見られたものではなかった。佐伯の手紙や千代子の手紙も一時編集者のところにあった。しかしそれは本が出版されたのち持ちかえられてしまった。私は「なぜ3階、2階に住んで顔を合わせられる距離にいるのに大量の手紙をやり取りし、そのラブレターが他人の家に保管されるのでしょうか？お互いに家庭を持つ二人が、そういう手紙をいかに親しい人とは云え、見せて預けるというようなことをするのでしょうか？」編集者は次のように述べた。「佐伯の手紙や千代子の手紙については一切関心がない、またこれに関してはプライベートなことで触れなかったとのこと。「佐伯祐三についてはもう関わりたくない。なにを聞かれても答えたくない。ただ、佐伯祐三の贋作は朝日も米子も祐正も少しは手を染めたであろう、また画商も関係していたであろう。

落合さんや他の関係者とも会ったことがある。佐伯の油絵というものも見せてもらったが、まったくだめなものであった。これは私の意見でもあるが、落合さんの立派な経歴を考えると不思議な気がする。どうして、ああいう文章を書くのか。調べられたら根拠もないし、また常識から大きく外れている。」園明子さんについて、私は当時の週刊新潮、二人の佐伯祐三、落合さんの本に書いてあることを話した。

以下その内容をまとめる。

吉園明子と佐伯贋作

1. 週刊誌 吉園関連記事 2009/ 3/ 9 22:36 [NO.9429 / 9431]
2. 自由と画布 2009/ 3/ 9 23:24 [NO.9431 / 9431]
3. 明子氏の学歴 2009/ 3/10 22:25 [NO.9433 / 9483]
4. 天才画家佐伯祐三真贋事件 2009/ 3/10 23:49 [NO.9437 / 9483]

1. 週刊誌 吉園関連記事

アエラの33ページ

明子はさまざまな人物に資料を小出しにしていった。武生市に寄贈した作品以外で、すでに複数の画商や実業家に分散して売却してしまった作品もある。落合氏 P 1 2 7 明子は山甚に佐伯作品 1 1 点などを代金を受け取ってしまった。

週刊新潮

「その気にさせた女性」抜粋

河北氏をその気にさせた女性とは？吉園さんを知る人の中には「慶応大学医学部卒」あるいは「東邦大学医学部卒」と彼女から聞いた人もいる。鎌倉で吉園さんに2億5千万円という大金を貸した人がいる。「そのころ吉園さんは天声人語を執筆して

いる。」「彼女の生い立ちは彦根の井伊家の出身」で、「実の父がもと彦根市長の井伊直愛さんだ」というのです。「障害者の福利施設を作りたいから寄付を」、「ワケあって吉園家に養女にでたのだが、その井伊家と吉園家で起こった事件の後始末に大金が必要になったと」こういうことで2億5千万円も貸してしまった。彼女の話は後で全てうそだとわかった。このことで訴えられかけたので実業家から4億円手に入れ、返済にまわしている。

... その鎌倉事件を落合氏は次のように記している。

明子氏が鎌倉で昭和63年ごろ、人助けのため急に資金の必要があったとき、かかっていたマッサージ師が聞きつけて、融資を申し出てくれた。著者は融資とはなかなか受けられないものとする。それが相手から申し込んできたことになっている。これは常識はずれ。週刊誌に書いてあることとはまったく逆である。

鎌倉署内では、カンノ刑事が威圧的な調子で「これから詐欺容疑で取り調べる」と言い始め、「早く払ってやれ」と強請したというのである。刑事が首になるかもしれない行動をとるであろうか。落合氏に言わせるとすべて弁護士もぐるで、明子氏は陥いられ2億3千万支払らわせられたとなっている。それが本当ならこの弁護士も訴えてもおかしくない・・・

さて週刊誌に話を戻そう。吉園さんを知る別の知人によると、そのころ「ギャラリーとぼ舎」という画廊を持ち、すさまじい勢いで絵を買い捲っていたという。「ギャラリーとぼ舎」を検索してみると、

個展：古都鎌倉有韻展（ギャラリーとぼ舎/神奈川鎌倉）12/16～28 昭和62年（1987年）と。鎌倉にギャラリーとぼ舎は本当にあったようだ。

河北氏の次男の弁

父と明子さんとのことでいろいろと、たとえば、病院の特別室への入院代は彼女もちなのではないかといった噂が立っているようですが、ちゃんと自分の通帳から出しています。父は無防備な性格で、本物と思ったからそういったんだという感じでしたから、しょうがないですよ。遺族のくせに、冷たいようですが、父が年をとって盲になったといわれれば、それもしかたのないことだと思います。

佐伯祐三のパリ日記編集者との会談Ⅲ

パリ日記の編集者との3回目の会合でその意味がわかる。山甚さんは武生市のお金持ちで、4億円で明子から佐伯の絵と称するものを手に入れた。編集者に見てほしいと依頼が来た。行って見てみたが、すべてまともなものはなかった。山甚さんは自分が武生市に迷惑をかけた第一人者でないと願っているようだ。パリ日記については一部本物と信じたから出版した。この日記を贋作と決めつけることは自分にはできない。しかし、吉園明子は信用できない。佐伯の大量の水彩画もあったがとても見れるものではなかった。匠さんが病気で入院した時、特別室に入った。とても高額な費用がかかる。それを明子が出した。匠さんは公務員なのでそういうことは許されない、早く全額返すように家族に話した。明子さんにもその話をしたが、「そうですよ、へへへ」で終わってしまった。河北倫明も同じ病院の特別室に入院した。そのお金の出所に関して、その遺族が週刊誌で話している。遺族が言うには冷たいようだが父は年のせいではぼけてわからなかったのです。父の入院費は明子が出したように言われて

いますが、当家が出したのです。つまり河北の入院費についての疑惑があったから、週刊誌に「それはなかった。」との発言があったのである。出版社としては、うそとわかって否定できないのであろう。すべての作品を贋作と見ている。彼は武蔵野美大の油絵学科卒。明子も信用していない。落合氏についても否定的だ。

佐伯の評伝や佐伯のパリを知れば、贋作事件はとても許せるものではないだろう。

金に執着し、人をだまし、巨額の金をとろうとする。明子がなぜ著名人にいとも簡単に著名人に近付けたか、それは贋作をギャラリーとぽ社で高額で売りさばいたお金があったからであろう。明子本人が週刊誌で、私は佐伯祐三さんなんて知らない、みんな私が悪いことになっているんですね、あははは、自らこの事件の首謀者が簡単に贋作を暴露してしまっているのである。それなのにいつまでも贋作事件をひっばっているのは金のためなのか、それはわからない。

週刊文春

その渦中の人物、吉園明子氏が今回小誌に口を開いた。今回の真贋騒動については？「もうわからない。でも今はもう私が作ったということになっているんですよ？」佐伯祐三贋作事件の核心を握る、このコレクションの人物はご本人でも真贋がわからなくなっていることをあっさり認めたのだ。「父が作ったのかもしれないね、ハハハハ。今回は自信がないですね。言われっぱなしで。父から聞いたわけじゃない。父との会話で佐伯祐三さんの名前は一度も聞かされたことがないんです。残された父の遺書を見ただけなんです。贋作派のボルテージは上がるばかり。その根拠はこれまでの行状にある。経歴詐称、火災保険や生命保険の詐欺疑惑、贋作絵画の販売を数え上げるときりがないのだ。

2. 自由と画布 2009/ 3/ 9 23:24 [NO.9431 / 9431]

「自由と画布」は吉園明子著。彼女の父周蔵が、佐伯祐三の精神的、金銭的援助をしていたと記している。佐伯を援助したお金の出所は周蔵の父からと最初は記されている。しかし、それが無理だと悟られると感じたのか、明子は後に親戚にあたる若松家からとお金の出所は変化する。

「第2号 自由と画布」

阿王氏が私に何度も質問されたことの一つに、周蔵の金銭の動きの確認でした。ひとつにはが大正8年ころから昭和3年頃までに、佐伯さんに都合するだけの、金銭に対する力があつたかどうか。二つには、周蔵が父、林次郎に無心した場合、それに対応できる、処分するなりの資産があつたかどうか。三つは、資産があつたとして、先祖から継いできたものを林次郎が、処分してしまで用意したかです。美術界に縁のなかつた私は、これは大変面倒なことに巻き込まれてしまった、と思いました。思えば私が阿王氏に相談したわけですし、ここは面倒になる前にいち早くこのことは取りやめようと思いました。

(中略)

私より20才近く上のいとこと、周蔵の一番下の弟の未亡人が健在だったりして、私の記憶違いが少し解明できましたが、吉園の生家ではいまだ財産を失くしたと周蔵の行為を怒っていることを知り、正直、私は仰天しました。

(中略)

周蔵は、当時としては大変な資産を売り払うことに専念したようですし、

(中略)

私が疎遠だった叔母やいとこたちは、いまだに周蔵を許してないこと、憎悪しているということ、今回改めて知ることになりましたが、数人いる周蔵の甥の中の唯一人だけが、こんなことを話してくれました。伯父さんは進歩的ないい人でした。金銭を使ったと言っても、それは父親が許したことだから、誰も依存を言うことはできないのです。しかし、「自由と画布 第4号」で突然次のように資金の出所が変わる。「佐伯祐三さんに協力を惜しまなかった人物は母方の親戚の若松家である」として若松忠次郎の話がでてくる。彼が周蔵の求めに応じて金を与えたとなっている。落合氏は「自由と画布」は参考にするものではないと言われるが、ここまで書かれているものを無視していいものだろうか。これらの「自由と画布」に書かれている経済的背景については武生市の調査によって全て否定されてしまう。落合さんですら「自由と画布」は伝聞によるものだからあてにならない。こんなもの議論の余地がないと不思議なことに問題にもしない。「自由と画布」なる本はそんなに簡単に片づけられていいとは思えないのだが。

その後、落合さんに明子氏が相談に行く。そして「天才画家 佐伯祐三の真実」が作られていく。この本ではカネの出所は佐伯をスパイとして育てるためとして大谷家からでてくる。それに加え周蔵の麻薬の栽培による莫大なお金ということになっていく。吉園佐伯関連の本では米子は悪妻のごとく書かれている。祐三は金がないことになっている。

それに反して、坂本勝、山田新一によれば米子がいかにいがいしく佐伯の世話をしていたか、また仲が良かったかが書かれている。また佐伯祐三は実家からの資金が十分あり、また絵が売れたため他人の金を必要としなかったのである。東京に来たとき祐三は7,000円という大金を祐正から遺産分けとしてもらっている。これは今の金で7,000万円を越える金であろう。また母からも十分な仕送りを受けていた。第2次渡仏の時、佐伯家の事情で金が出せなかった。兄、祐正の結婚にもかなりの金が使われたのであろう。それで佐伯の絵を売る会が開かれた。これもくわしく書かれている。この時得たお金は6,000円、米子の実家に3,000円渡し、月々返済してもらおうということで3,000円の金を持ってフランスに向かった。フランスでは路上で買っていく人が増え、画商もつこうとしていた。つまり、佐伯は十分お金を持っていたのである。にも関わらず、「佐伯祐三の巴里日記」や「自由と画布」では佐伯祐三の両親は兄祐正を特別に可愛がり、祐三が家族に疎んじられていたことが強調されている。なおかつ金がなかったとしている。そのため佐伯祐三は周蔵に対してお金の無心をし、周蔵との深い絆があったとしている。

「素顔の佐伯祐三、山田新一」

ここには祐正の弟に対する愛情は深く莫大な仕送りを惜しまなかったとある。また、「山田が佐伯の死後、1年ほどしてまっすぐ光徳寺を訪れたところ、彼のは母上は文字通り走りつつ転びつつ玄関の式台に来て『秀かー』と泣いて泣いた。異国に寂しく散った愛児への母上の愛惜は、一方的なものでなく、その死をいつまでも信じかね、僕の不意の訪れを、秀丸の帰国と錯覚し、つい僕もほだされて、乞われるままに3泊して佐伯の霊を改めて慰めた。」とある。祐三は愛情深い家庭の中で育っていたのである。

「佐伯祐三の巴里日記」

本来日記を書く場合、パリに着いた感動や、人との交流、絵を描く場所を見つけた感動を記すだろう。ところが、この巴里日記にはそういうことはなく周蔵のことがほとんどで、贋作を真作としようとする作為が感じられる。

3. 明子氏の学歴 2009/ 3/10 22:25 [NO.9433 / 9483]

彼女は有名な人の知り合いであり、自分は由緒正しい人間の血を引いている、市長の係累であると公言する。こういうことは言わなくても書かなくてもいいはず。人を信用させる常套手段だと思われる。週刊誌では東大医学部卒、東邦大学医学部卒と聞いた知人がいるとある。「自由と画布」では、自分は医学部を中退したと書いている（どこの大学とは書いていない）。落合氏の本では明子氏は東邦高校を卒業、東邦大学医学に入学したが、入学後2ヶ月で「教授に君は医師としての繊細さが欠如している」と言われて退学したとなっている。入学2ヶ月の教養学科野時にそんなことを言う教授がいるだろうか？せめて一学期が終わるまで、学期末試験が終わるまでは暖かい眼でみまもるはずだし、他の教授も黙っていないだろう。また、それを聞いて「はい、そうですか」というような生徒、親がいるとは思えない。これは明子氏の言葉をよほど人のいい落合氏が本に書いただけと思われる。

4. 天才画家佐伯祐三真贋事件 2009/ 3/10 23:49 [NO.9437 / 9483]

落合氏の著書によると「自由と画布」は伝聞と随想だから、これをまじめに取り上げたほうが悪いという書き方をしている。しかし、ここには周蔵の日記なども入っている。「巴里日記」も無垢な女性明子氏が匠の言うままに、本にしてしまったから、これも誤解を招くとしている。つまり、上記の二つの本は明子氏がもっとも深く関与しているのに、あてにならないとしてしまう。落合氏は武生市で明子氏の代理人となって動き、武生市資料（この武生市資料には、残念ながら市が途中で調査を打ち切りにせよとしたため、最後まで事実を書く事ができなかった。この事件をおこす原因をつくった市長を守るため真実を暴けなかったと思われる。）が発表され、また市が佐伯作品をかぎりなく灰色に近い黒としてこの寄贈を断ったとき、落合氏はその反論を書いている。そして書かれたのが落合氏の「天才画家佐伯祐三真贋事件の真実」。この本になって2冊の本の周蔵の過去は否定され周蔵は日本国のスパイ、草ということになる。佐伯もスパイであったという話に変えられていく。資料の出方が不思議である。次から次へと都合のいい

資料が後から後から出てくる。「これを証明するものがあればなあ」というとその資料を明子氏が持ってくる。どうしてこうも次々と落合氏の希望通りの資料が出てくるのだろうか？落合氏の本230ページ。12月12日、池田チャが医療老人ホームを移ることになり、手伝いに行った明子は、その荷物の中から書状を見つけた。（ギンズル書簡233ページ）。私は明子に告げた。「これで輪郭はつかめた。あとは公的な書証がでてくれば、それでできあがりだが、公式記録は何も無いようですね。せめて、海外渡航記録でも出てくればいいのに、なぜ出てこないんだろうかなあ？」「そのことでお伝えしようと思っていたのですが、父は幾つか偽名を使っていたようです。」その後、間もなくギンズルの手紙は7通見つかった。チャの着物の袂から、何度かにわけてそれは出てきた。その文面でこれまで調べて事を裏付けし肉付けしていくこと

ができた。ここで周蔵が草ということになる。

241 ページ～

周蔵手記が現れ、これが発見されるたびに届けられた。ここでタバコ商小山健一の名で周蔵が渡航したとなる。この名まえを落合氏は外交資料館で見つけたと書いている。しかし、小山健一が周蔵であったという証拠は何もないではない。この本に書かれていることは、明子氏よりの伝聞を他の多くの人書いている歴史的事実を結び付けているだけで、まったく証拠がない。つじつまがあわないところがいっぱいあるのは「佐伯が何度も書き直すように指示した。なぜかわからないが日にちも違うようにしている」と佐伯のせいとしている。「周蔵の長男、緑が死んでから佐伯作品を世に出せ」という周蔵の遺言。これも理解できない話、佐伯を一番知る山田の死に合わせて世に出してきたものであろう。

しかしどうしても作り話だと断言できなかつたのは米子が自分が加筆しましたと書いている下記の新聞記事が示されていたことである。

「1995年11月11日 00:00:00 共T552社会035

「祐三の絵に私が加筆」故佐伯夫人の書簡発見、支援者に遺作の譲渡懇願、作家像の見直しも

(本記)

日本を代表する洋画家として大正から昭和初期にかけてパリを中心に活躍した故佐伯祐三の妻で洋画家の故米子夫人が、かなりの数の佐伯作品を加筆して仕上げている事実を自ら告白している書簡が十一日、共同通信社が入手した佐伯に関する資料から見つかった。書簡は、生前の佐伯を物心両面で支援していた精神カウンセラー、故吉蘭周蔵氏あて。仕上げの手法を明示し、加筆すれば「売れる画」になるとして、吉蘭氏に手元にある佐伯の遺作を譲渡するよう懇願している。夫人自ら加筆の事実を告白した資料が明らかになったのは初めて。内容が事実とすれば”夭折(ようせつ)の天才画家”佐伯の作品研究の見直しを迫ることになりそうだ。

見つかった米子夫人の吉蘭氏あて書簡は全部で十一通。和紙やノートの切れ端に、鉛筆や筆で書かれている。岩手県遠野市に住む吉蘭氏の長女明子さん(51)が所有している。米子夫人が加筆を明かした書簡は縦十八センチ、横十四センチの和紙二枚に鉛筆でびっしり書き込まれているが、日付は入っていない。全国裁判長選任鑑定人が筆跡鑑定。米子夫人が佐伯の友人の洋画家、故荻須高德にあてた昭和六年三月二十五日付の書簡と比較した結果、同じ米子夫人の筆跡と判明した。

夫人は佐伯を「秀丸」と幼名で呼び「秀丸そのままの絵ではだれも買っては下さないのです。私が手をいれておりますのよ。秀丸もそれをのぞんでおりましたし。」(文中の旧仮名遣いは新仮名遣いに変更、以下同じ)と、佐伯の同意を得て加筆していたと主張。その上で「画つらの絵のぐや下地が厚いものには ガッシュ(不透明の水溶性絵の具)というものをつかい 画づらをととのえ また秀丸の絵の具でかきくわえますでしょう。すこしもかわりなくよくなりますのよ」と具体的な加筆方法を説明している。米子夫人は「秀丸はほとんど仕上げまで出来なかつたのです」とした後、「あなたのお手元にあるものを私が仕上げれば、すぐに売れる画になりますのよ」と、仕上げた佐伯の作品による展覧会の開催を吉蘭氏に持ち掛けている。

米子夫人は明治三十年七月生まれ。東京・銀座の象牙(ぞうげ)商の長女で、水

墨画の北画を学んだ。大正九年十一月、佐伯と結婚し二度の渡仏にも同行。佐伯が昭和三年八月十六日に三十歳で亡くなった後、同年十月末に帰国。洋画家として活動したが、同四十七年十一月に七十五歳で死亡した。同時に見つかった書簡の中には「告別式（同三年十一月二十五日）のお知らせをおいてまいりました」と書かれていた。帰国直後の十一月十四日付のものや、吉藺氏から遺作が大量に送られて来たことを喜ぶ年不明の一月二十日、二十四日付のものなどがある。このため、書簡は米子夫人が帰国直後の昭和三年十一月から翌年の夏ごろまでに書かれたと推測される。

美術評論家の坂本満・聖徳大学教授（美術史）の話

佐伯祐三の作品に米子夫人が加筆して仕上げているとか、佐伯の作品といわれるものの中に、やはり洋画家の米子夫人自身の作品が混じっているとのお話は、二十年ぐらい前からあった。書簡に書かれていることが事実なら、近代の日本美術史と佐伯の研究に重大な影響を与えることになるだろう。

そういう時期が数カ月続いたのち「二人の佐伯祐三」という本を手に入れた。この本には武生事件が詳細に書かれていて、新聞記事のいい加減さが暴露されていた。私はようやく眼がさめた。武生市の資料及び「自由と画布」を手に入れ、またこれにかかわる当時の新聞、雑誌をすべて集め、落合氏のおこした中島氏名誉毀損裁判記録まで眼を通した。ようやくこの贋作事件の真相がわかったのである。この贋作事件のおかげで他の佐伯の文献を多く読むことができた。「パリ日記」の編集者にも2回目会いに行き彼が後悔していることも納得できた。下記の新聞記事はこの事件の決着を示す一つとなるであろう。

贋作事件の新聞報道について 8 2009/ 3/12 1:06 [No.9447 / 9483]

1999年12月22日 00:00:00 共X039社会110

◎女性役員に懲役5年求刑 1億2千万円詐欺事件

知り合いの会社社長から現金一億二千万円をだまし取ったとして、詐欺罪に問われた岩手県遠野市の会社役員吉藺明子被告（55）の公判が二十二日、東京地裁（近藤宏子裁判官）で開かれ、検察側は「車の購入など欲望を満たすため、被告を信頼していた被害者を裏切った」として懲役五年を求刑した。弁護側は最終弁論で「被告が所有していた洋画家故佐伯祐三氏の作品とされる三十六点の絵画などを被害者に渡し示談が成立している」と述べ、執行猶予付きの判決を求めて結審した。判決は来年一月十四日。

起訴状によると、吉藺被告は一九九四年十一月、知り合いの東京都内の不動産管理会社社長に「絵画を売って神奈川県鎌倉市の土地の固定資産税を払うつもりだが、来年になりそうなのでそれまで貸してほしい」と言い、一億二千万円をだまし取った。吉藺被告が示談で被害者に渡した作品は、福井県武生市に寄贈される予定だったが、画商らに一部を贋作（がんさく）と判定され、真贋論争に発展した絵画も含まれているという。